

## 第2章 男女の別（人口性比）

### 1 人口性比

人口性比は調査開始以来最も低い101.6へ

人口を男女別にみると、男性は180万3579人、女性は177万6049人で、男性が2万7530人多く、人口性比（女性100人に対する男性の数）は、101.6と、調査開始以来最低となりました。

本市の人口性比の推移をみると、第1回調査の大正9年以降、一貫して100を上回っていますが、その時々々の社会情勢により上下しています。大正9年から昭和10年にかけて性比は低下してきましたが、本市産業の重工業化により労働力人口を吸引したことで、昭和15年に108.2に上昇しました。第2次世界大戦により男女別構成に変化が生じ、昭和25年には102.0にまで低下しました。その後、高度経済成長に伴う都市部への人口集中により、性比も徐々に上昇し、昭和40年の107.8まで上昇しました。それ以降は、昭和60年、平成2年に上昇したものの、高齢化の進展に伴う女性の死亡率低下などにより、性比は低下傾向を示しています。

平成17年の人口性比を年齢5歳階級別にみると、15歳未満の各階級ではおおよそ105となっています。15歳から44歳にかけては110前後と高くなっていますが、そのうち、30～34歳にかけては、104.4と低い数値になっています。40歳以上では、概ね年齢が高くなるに従って低下し、55歳から59歳の階級において男女がほぼ同数となり、60歳以上では女性が男性を上回り、その差は年齢の上昇とともに拡大傾向にあります。（表2-1、2-2、図2-1）

表2-1 男女別人口の推移

（大正9年～平成17年）

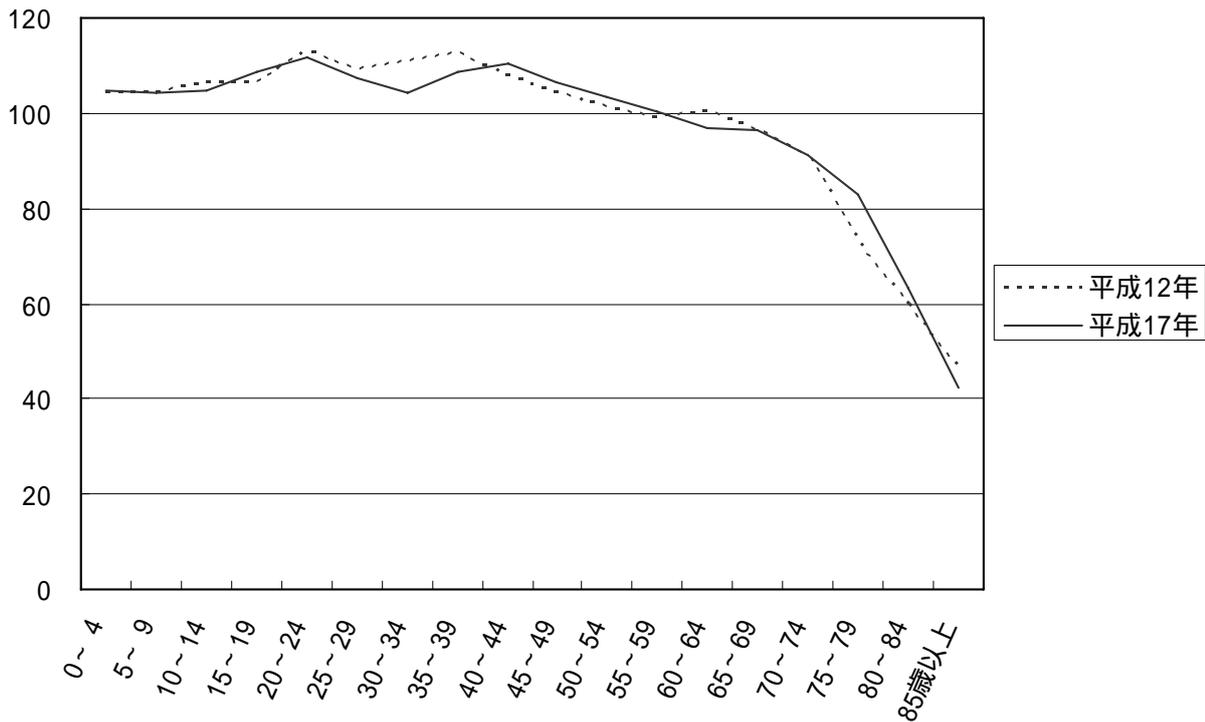
年次	人口		人口性比
	男	女	
大正 9年	224,046	198,892	112.6
14年	214,341	191,547	111.9
昭和 5年	321,415	298,891	107.5
10年	360,363	343,927	104.8
15年	503,199	464,892	108.2
22年	417,193	397,186	105.0
25年	480,242	470,947	102.0
30年	579,774	563,913	102.8
35年	700,727	674,983	103.8
40年	927,970	860,945	107.8
45年	1,160,455	1,077,809	107.7
50年	1,349,001	1,272,770	106.0
55年	1,417,015	1,356,659	104.4
60年	1,532,758	1,460,168	105.0
平成 2年	1,651,527	1,568,804	105.3
7年	1,685,332	1,621,804	103.9
12年	1,735,392	1,691,259	102.6
17年	1,803,579	1,776,049	101.6

表2-2 年齢（5歳階級）別人口性比の推移

（大正9年～平成17年）

年齢	大正9年	昭和25年	45年	12年	17年
総数	112.6	102.0	107.7	102.6	101.6
0～4歳	101.0	104.9	105.4	104.4	104.7
5～9	103.5	102.9	104.6	104.4	104.5
10～14	108.2	101.6	104.0	106.3	104.9
15～19	126.8	106.7	128.5	106.3	108.8
20～24	111.0	116.2	129.4	112.9	111.6
25～29	127.9	92.6	107.0	109.1	107.4
30～34	123.7	90.0	109.3	110.7	104.4
35～39	118.4	100.6	109.6	112.4	108.5
40～44	120.8	104.1	112.0	107.9	110.6
45～49	121.5	110.1	95.5	104.1	106.3
50～54	113.6	108.7	90.1	101.4	103.2
55～59	109.2	110.1	97.2	99.1	100.5
60～64	96.5	98.5	94.4	100.5	96.8
65～69	78.8	77.5	89.9	96.6	96.6
70～74	68.3	67.4	78.8	91.2	91.1
75～79	63.8	59.1	70.3	72.9	82.8
80～84	46.9	47.8	57.3	60.0	63.3
85歳以上	36.4	29.7	42.7	46.3	42.4

図2 - 1 年齢5歳階級別人口性比（平成12年、17年）



全ての大都市で人口性比が低下

大都市の人口性比をみると、川崎市が107.4で最も高く、次いで横浜市の101.6、さいたま市の101.0、千葉市の100.3となっており、これら関東の4市で男性人口が女性人口を上回っています。また、これらを含む6都市で全国平均（95.3）を上回っています。

平成12年に比べて、全国平均が0.5ポイント減少しており、また大都市においても札幌市、仙台市、千葉市の1.5ポイント減など、すべての都市で0.5ポイント以上減少しています。（表2 - 3）

表2 - 3 大都市の人口性比（平成7年～17年）

都 市	7年	12年	17年	平成7年～ 12年の差	平成12年～ 17年の差
札幌市	92.3	91.1	89.6	1.2	1.5
仙台市	98.0	97.0	95.4	1.0	1.5
さいたま市	...	...	101.0	...	...
千葉市	102.4	101.8	100.3	0.6	1.5
東京都特別区部	98.8	98.9	98.4	0.1	0.5
川崎市	109.9	108.3	107.4	1.6	1.0
横浜市	103.9	102.6	101.6	1.3	1.1
静岡市	...	...	94.8	...	...
名古屋市	99.5	99.1	98.6	0.4	0.6
京都市	93.4	92.2	91.1	1.2	1.1
大阪市	96.5	96.0	94.9	0.5	1.1
神戸市	92.3	91.5	90.4	0.8	1.1
広島市	95.7	94.7	94.0	1.0	0.7
北九州市	90.3	89.8	88.6	0.5	1.2
福岡市	94.6	93.4	92.4	1.2	1.0
全国	96.2	95.8	95.3	0.4	0.5
神奈川県	104.3	103.1	102.2	1.2	0.9

## 2 行政区の人口性比

人口性比 100 を下回る区が平成 12 年の 5 区から 10 区へ

行政区別に人口性比をみると、中区が 110.3 で最も高く、以下、鶴見区（109.3）神奈川区（106.1）港北区（104.4）都筑区（103.0）西区（102.1）と続き、これら 6 区で市平均を上回っています。一方、人口性比が最も低いのは栄区の 97.2 となっています。

平成 12 年と比べると、鶴見区を除く全ての区で人口性比が低下しており、100 を下回った区は 5 区から 10 区に増加しています。特に、緑区（2.3 ポイント低下）や青葉区（2.1 ポイント低下）などで低下幅が大きくなっています。（表 2 - 4）

表 2 - 4 行政区の人口性比（平成 7 年～17 年）

行政区	7年	12年	17年	平成7年～ 12年の差	平成12年～ 17年の差
横浜市	103.9	102.6	101.6	1.3	1.1
鶴見区	110.2	109.3	109.3	0.9	0.0
神奈川区	108.7	106.9	106.1	1.8	0.8
西区	103.2	103.1	102.1	0.1	1.0
中区	109.5	110.6	110.3	1.1	0.3
南区	100.6	100.2	99.5	0.4	0.7
港南区	101.6	100.6	99.9	1.0	0.7
保土ヶ谷区	102.9	102.1	101.2	0.8	0.9
旭区	101.4	99.8	99.1	1.6	0.7
磯子区	101.3	98.9	97.4	2.4	1.5
金沢区	101.2	99.7	98.7	1.5	1.0
港北区	107.3	105.9	104.4	1.4	1.5
緑区	102.4	102.2	99.9	0.2	2.3
青葉区	105.4	101.8	99.7	3.6	2.1
都筑区	105.7	104.4	103.0	1.3	1.4
戸塚区	103.5	101.6	100.4	1.9	1.3
栄区	98.5	97.9	97.2	0.6	0.7
泉区	100.8	99.3	97.7	1.5	1.6
瀬谷区	103.1	101.1	99.2	2.0	1.9